

自由論題2 「東アジア・東南アジアの歴史」

報告1

三宅康之（関西学院大学）

「ビルマ連邦共和国と中華人民共和国の国交樹立過程の解明」

Burma's Establishment of the Diplomatic Relations with the Chinese Communist Regime, 1949-1950

1949年10月1日、中華人民共和国の建国が宣言されると、その直後からソ連および社会主義国家が陸続と承認を表明し、国交を樹立した。他方で、国共内戦が終了して中華民国が完全に消滅したわけでもなかったことから、非社会主義諸国は、中華民国を支持するアメリカ合衆国の要請もあって、早期承認に踏み切ることは無かった。こうしたなか、非社会主義諸国として最初に承認に踏み切ったのは、ビルマ連邦共和国であった。12月16日のことである。ついで年内ぎりぎりにインドが承認を公表し、年が明けて1月中旬にかけてイギリスをはじめとする英連邦諸国、北欧諸国などが続いたのであった。非社会主義諸国との国交樹立については、4月1日にインドが第一号となり、先陣を切ったビルマはインドネシアに次ぐ三番手となった。このとき、すでに承認から半年以上を経た6月8日となっていた。

では、なぜこうした展開を経たのか。本報告は、この単純な疑問を起点とし、先行研究に加え、中台英米のほか、ミャンマー国立公文書館、インド国立公文書館などで得られた史料に基づき、一連のプロセスを再構成することを目指す。

報告はいくつかの局面に区分して検討を進める。

- (1) 前提である緬中関係の概観、
- (2) 中華人民共和国承認公表に至る外交（1949年後半）、
- (3) 国交樹立交渉（1950年前半）、
- (4) 大使交換と直後の緬中関係（1950年後半）

以上の作業により、中華人民共和国の誕生という国際秩序の大変動に直面せざるを得なかった戦後東南アジア・南アジア新興国の政治外交指導者サークルの相互関係、および建国直後の中国外交のありように迫りたい。